2024. 6 No.216

# 平和文化

公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字　松井一實
広島平和文化センター会長

鐡谷信男 寄贈

様々な視点・角度から戦争・原爆被害の悲惨さとその愚かさをリアルに実感できる広島修学旅行
（写真提供:広島市、広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館）

## 目　次

広島修学旅行イメージ画像 …… 1
「核兵器による人道的結果」が明確に示している核軍縮の緊急性
（アレクサンダー・クメント） …… 2
被爆体験記「核兵器禁止条約の早期批准に願いを」（伊藤正雄） …… 3
海外からの来訪者が発信するメッセージ …… 4
子どもたちが「平和文化」を身につける出発点となる広島への修学旅行（谷史郎） … 5
英国におけるヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展 …… 6
「大邱の日」・「ハノーバーの日」を開催／「ひろしま留学生基金」にご協力を … 7
広島市民じゃけえ!（フセインさん）／
「広島市・安芸郡外国人相談窓口」をご利用ください …… 8

（公財）広島平和文化センター　〒730-0811　広島市中区中島町１番２号
TEL（082）241-5246（代表）　FAX（082）542-7941　E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
令和６年（2024 年）６月／年４回発行　［URL］ https://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

# 「核兵器による人道的結果」が明確に示している核軍縮の緊急性

アレクサンダー・クメント
オーストリア　外務省軍縮・軍備管理・不拡散局長／大使

核兵器禁止条約（TPNW）の根拠となっている考え方は、核兵器の使用がもたらす人道的結果が極めて深刻であること（莫大な破壊力等により、地球規模の影響をもたらし、人類の生存さえ脅かしうること）に加え、核兵器に関連するリスクが高すぎることから、核抑止は、国際安全保障の持続可能な基盤とはなり得ないという主張です。

次々と発表される科学的証拠により、核兵器使用の影響は、これまで考えられていた以上に世界的、連鎖的、かつ壊滅的になることが実証されています。たとえ「限定的」な核兵器の応酬であっても、すべての国々とその国民が、地球上のどこにいようとも、様々な形で副次的被害者になるリスクにさらされています。それ故、核兵器禁止条約は、核抑止による安全保障のパラダイムは、非常に不安定で、壊れやすく、持続可能でないだけでなく、非核保有国ひいては全人類の安全保障を著しく損なうと結論付けています。

世界的に核のリスクが増す今、この懸念は正当なものであるだけでなく、根拠に基づくもっともな安全保障の視点を表しています。TPNWの支持者たちは、条約の中で、一国または複数国による声明の中で、第一回および第二回の締約国会議で採択された宣言の中で、この視点を繰り返し強調してきました。

しかし、核保有国やその多くの同盟国は、核兵器と核抑止が「究極の安全保障」を提供すると信奉しています。これこそが、核軍縮の進捗を妨げ、核兵器のない世界に向けた進展を阻害している主たる原因です。

実際に進展を望むのであれば、パラダイムの転換が必要であり、核兵器に関する議論を変える必要があります。核抑止の安定性を前提とし、核兵器が紛争で使用されることは最終的にはないとの考えから脱却し、核抑止が失敗した場合の人道的結果について具体的に熟考すべきなのです。

これがTPNWの先駆けとなった人道的イニシアティブ（「人道的・人類的アプローチ」）の核心でした。核兵器が爆発した際の人道的結果に関する国際的な議論を重視し、科学的証拠に基づいて、核兵器が使用された場合に何が起こるのかを具体的に推定し、核兵器に関連するリスクの複雑さにも焦点を当てました。

このプロセスにおいて、2012年から2015年にかけて、核兵器の人道的影響に関する新たな証拠を提示し、また、核リスクについて理解することを目的とした、一連の国際会議が開催されました。

人道的影響に関し、中でも重要だったのは、いわゆる限定的核戦争、つまり今日現存する核兵器がごくわずか使用されただけでも、核の冬を引き起こす可能性があるという新たな証拠でした。核爆発が引き起こす大火災により、大量のばい煙が大気の高層部へと運ばれ、地球全体に拡散され、数年間にわたり、中緯度の多くの地域で気温が大幅に低下する核の冬が生じるのです。主食作物の生産は世界的に大打撃を受けることになります。

この新しい科学研究は、気候変動科学からの派生物ですが、これは核兵器の議論に大きな影響を与えました。北半球の2つの国家間の核戦争が、南半球、例えばサハラ以南アフリカで飢餓を引き起こすとしたら、これは深刻な法的および倫理的問題を提起するものであり、現状の核兵器の正当性について疑問を投げかけるからです。

同様に、一連の国際会議の場で、核リスクの複雑さへの理解が深まったのも顕著な特徴でした。ほとんどの国が、核兵器システムが、いかに危険で、脆弱であるかを示す過去の事例に衝撃を受け、これまで人類は、幸運に恵まれたというだけの理由で、幾度となく核災害や事故から逃れてきたのだと知り、驚愕しました。

しかし、おそらく最も重要だったことは、被爆者や核実験の被害者に発言の機会が与えられたことでした。

被爆者は、会議に参加し、自らの恐ろしい体験を証言しました。太平洋やカザフスタンなどの過去の核実験の被害者も同様です。このことは、議論の方向性を、非常に抽象的で、理解の難しいトピックから、具体的な人間の体験へと変化させました。

この核兵器の使用による人道的結果とリスクに関する新たな議論は、非核保有国の間に、大きなうねりを生み出しました。2015年までに、国連において、159カ国が、核兵器のもたらす非人道的な結末に深い懸念を示す共同声明を支持しました。また、138カ国が、オーストリアが提案した「受け入れがたい非人道的な結末及び関連リスクの観点から、核兵器の禁止に向けた法的なギャップを埋める」ための誓約を支持し、2017年の国連における核兵器禁止条約の交渉と採択へ向けたモメンタムを生み出しました。

TPNWは、まだ若い条約です。現時点では、93カ国がこの条約に署名し、そのうち70カ国が批准しています。この条約は、世界の核秩序において蚊帳の外に置かれていた大部分の国々に意見を表明する機会を与えた点で、すでに大きな影響を及ぼしています。TPNWを普遍化していくことと、核兵器の禁止に関する議論が、この条約の主要な目標です。TPNWの署名国は、市民社会団体と共に、この目標を着実に追求し続けます。

そこには、より多くの国々に条約への参加を求める取組が含まれます。なぜなら、TPNWの批准と署名が進むほど、その規範的価値が世界規模で高まること

になるからです。

同時に、核兵器の人道的結果とリスクに関する理論的根拠を推進し続けることも同様に重要です。核軍縮の進展を促し、不安定な核抑止パラダイムから脱却することが喫緊の課題であることを明確に示すものだからです。

TPNWの多国間の取組は、核兵器と安全保障の問題に関し、代替的なアプローチを示しています。同条約は核兵器の放棄を強制できるわけではありませんが、強力な議論と証拠を通じて、核兵器には正当性、合法性、および持続可能性が欠如していることについて、説得力のある論拠を提示しています。核兵器国が、核軍縮に向けて具体的な取組を始め、不安定な核抑止体制から脱却する準備が整った時のための基盤を、同条約は築くことができます。

ほとんどの核開発が軍縮とは逆方向に向かい、核保有国のリーダーシップが不在であるという極めて暗い現状において、TPNWは不可欠であり、重要な希望の光となり得る可能性を秘めています。

（2024年5月）

（本稿で表明された見解は、著者個人のものであり、必ずしもオーストリア外務省の立場を反映するものではありません。）

## プロフィール

**〔アレクサンダー・クメント〕**

**ウィーン、ジュネーブ、包括的核実験禁止条約機関などの準備委員会で軍縮や核不拡散に関する問題に従事。2016年から2019年まで、EU政治・安全保障委員会のオーストリア常駐代表（大使）。核兵器の人道的影響に関するイニシアチブや核兵器禁止条約（TPNW）の立案者の1人（TPNW第1回締約国会議議長）。**

被爆体験記

# 核兵器禁止条約の早期批准に願いを

**伊藤（いとう）　正雄（まさお）**
**本財団 ヒロシマ ピース ボランティア、被爆体験証言者**

## 証言活動を始めたきっかけ

私は今年83歳になった老人ですが、被爆当時は5歳にもなっていない子供でした。

65歳で一度目の定年退職を迎えた時、知り合いの教会の牧師が、「伊藤さん、これから毎日何するん？ こんなのはどうかね？」とヒロシマ ピース ボランテイアの募集記事を見せてくれました。その足で平和記念資料館を訪れ申込みをしました。当時の担当者から、「伊藤さんは被爆者なので、証言活動もしませんか？」と誘われましたが、「被爆者と言っても当時4歳で、知らないことも多いので。」とお断りをし、ピース ボランテイアの研修を受けて活動を始めました。

2012年に広島市が被爆体験伝承者の養成を始めた時、これなら私にもできるかもしれないとの思いで、１期生として3年間の研修を受け、2015年4月に伝承者の委嘱を受けました。そして、委嘱状を受取ったその足で横浜に向かい、ピースボートの「ヒバクシャ地球一周証言の航海」に伝承者として参加しました。

原爆投下から70年のこの年の航海では、平和首長会議との合同プロジェクトとして加盟都市に寄港し、証言活動を行いました。この時私は、伝承者としての話に加えて、自分自身の体験談への反響を強く感じました。また、ICANの活動を知ったことで、核兵器廃絶の願いはヒロシマ・ナガサキだけではなく、世界人類の願いだと確信しました。これがその後の平和活動の原点になったように思います。

## 私の被爆体験

私は、爆心地から3.2kmの自宅前で被爆しました。道路で三輪車に乗って遊んでいる時でした。青白い閃光（せんこう）が東から西にピッカーと走りました。その途端、何メートルか吹き飛ばされ、一瞬気を失いましたが、気を取り戻すと泣き泣き家に駆け込みました。玄関口で母親が待ち構えており、私が下駄を脱いで上にあがろうとした時、「脱がんで良いよ、早くこちらへ。」と手を引いてくれました。玄関や窓という窓のガラス片が家中に散乱していたからでしょう。

家の一番奥の部屋の畳を一枚めくると防空壕（ぼうくうごう）の入口があり、私たちはそこへ逃げ込みました。幼なかった私には何が何だかさっぱり分かりませんでした。

我が家は焼けることも倒れることもありませんでした。また、「黒い雨」が最も多く降った地域の一つでしたが、私たちは防空壕に避難していたため直接濡（ぬ）れる事はありませんでした。

しかし、私には12歳の兄と10歳の姉がおり、兄は袋町（ふくろまち）小学校に、姉は空鞘町（そらざや）（現在の中区本川町（ほんかわ）辺り）にある材木店の母の実家に居ました。両親は小さな町工場を経営しており、小型トラックを所有していたため、父は直ちに救助活動に駆り出された様ですが、街中は火の海で思う様には活動できなかったようです。父は夜遅くに傷だらけの兄を連れて帰り、両親は懸命の看護を続けました。姉は爆心地から1km以内に居たため、叔父、叔母、従兄弟たちと一緒に、一瞬のうちに犠牲になったようです。現在も遺骨すら判明していません。

当時幼かった私が家族のことより鮮明に思い出す嫌な思い出は、市内から避難してこられた多くの人たちのことです。我が家は広かったので幾人かの人たちを休ませてあげていましたが、その人たちは次々と亡くなっていきました。8月の暑い時ですから、遺体は一晩で腐敗が進み、悪臭が漂うようになりました。その

ような遺体が近くの空地に集められ、火葬が始まりました。10人ぐらいを積み重ねては石油を掛けて焼却していました。そんな光景が一週間も続いたでしょうか。その光景だけは私の脳裏に焼き付き、未だに離れることはありません。

父が連れて帰った兄は、両親の懸命の看護にもかかわらず、3週間後の8月29日に息を引き取りました。兄は、多くの遺体処理が行われたあの空地で、近所の人たちの助けを借りて荼毘（だび）に付されました。

### 被爆後の苦難

生き残った私たちにとって、本当の苦難はその後にありました。被爆後5年経ち、私が10歳の頃、父親が原爆症の後障害である「原爆ぶらぶら病」になりました。入退院を繰り返し、一年のうち半年は原爆病院で、半年は自宅で療養という状態でした。家業は母が継ぎましたが上手くいかず、とうとう夜逃げ同然の引っ越しをせざるを得なくなりました。私は、入学したばかりの高校を退学し、住込みでの労働を強いられました。15、6歳の少年にとって、それは過酷なもので、半年後には結核を患い、療養所に送られました。

その後も波乱万丈の人生ではありましたが、現在は原爆養護ホームで安らかな生活を送らせて頂いております。恵まれた現在へのお礼の心を込めて、平和記念資料館でピース ボランテイアとして、そして被爆体験証言者として、核兵器のない世界に向け、核兵器禁止条約の早期批准を願いながら、活動を続けています。

### プロフィール

〔いとう　まさお〕

昭和16年（1941年）1月3日生まれ。4歳の時、爆心地から3.2kmの自宅前で被爆した。2010年からヒロシマ ピース ボランティアとして活動。2015年から被爆体験伝承者として活動し、「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」に参加。2022年からは被爆体験証言者としても活動している。

## 海外からの来訪者が発信するメッセージ

～平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に訳したもの（仮訳）を掲載しています～

### V. ムラリーダラン／インド外務担当閣外大臣

ここ広島と長崎で起きた大いなる悲劇により亡くなられたすべての方々に、厳粛な哀悼の意を捧げます。遺族の方々と被爆者の方々が受けられた苦しみは計り知れません。

この美しい都市の再建に尽力された広島の人々と広島市の計り知れない回復力に敬服の念を抱きます。この人類の不屈の精神に慰めを見出し、暴力のない平和な世界を目指して絶え間なく努力し続けましょう。

（2023年11月9日）

### メリッサ・パーク／ICAN事務局長

私たちの美しい地球に核兵器はふさわしくありません。広島がそのことを示しています。

核兵器が私たちを滅ぼす前に、核兵器をなくしましょう。

（2024年1月7日）

### デニス・フランシス／第78回国連総会議長

この芳名録に記帳している間も、人類は、ウクライナや中東など世界各地で戦争を続けています。私たちは暴力を回避し、防ぎ、紛争を平和的な手段で解決するための経験と判断力を備えているにもかかわらず。私は、国際社会全体と全ての人々が、常に「平和を推進する」ことに取り組めば、皆が恩恵を受け、実際に繁栄すると考えています。この地球上における私たちの未来は、平和を培い、育む勇気を見つけ出すことができるかどうかにかかっています。

（2024年2月12日）

### ルクムエナ・センダ／駐日コンゴ民主共和国大使

平和への道は長い。

平和の価値は計り知れない。

全ての人のために、私たちは皆、常に平和を大切にするべきである。

（2024年3月8日）

# 子どもたちが「平和文化」を身につける出発点となる広島への修学旅行

## ―各学校に対するアンケート調査結果より―

谷（たに）　史郎（しろう）
広島平和文化センター　副理事長

広島への修学旅行による訪問者数は、令和５年度で34万4千人です。子どもたちの広島訪問を１回と仮定し試算すると、全国の約3分の1が訪れていることになります。また、地域別の訪問割合は、中国地方102%、四国地方76%、近畿地方49%、関東地方22%などとなっています。

このような広島修学旅行の拡充を目指して、全国の1,121の小・中・高校を対象に、本年3月アンケート調査を実施し、41%、456の学校から回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。

今回の調査で分かった重要な事項として、3点を挙げることができます。

第一に、子どもたちが、広島修学旅行により、戦争や原爆をリアルなものとして感じるようになることが分かったことです。

広島の地で、見学や講話、平和集会など、多岐にわたる平和学習を行う中で、「当時をそのままに伝える、原爆ドーム・資料館」、「一人称で平和を語る、被爆者などの広島の人々」、「平和記念公園にしか存在しない、緊張した空気感」、「熱心に見学する外国人」、「同世代の子どもたちの被害や家族の悲しみ」といった様々な学びの相乗効果によって、戦争や原爆被害の悲惨さと愚かさを、厚みを持った生の体験として、リアルに実感することになります。すなわち、過去や他の地域での出来事としてではなく、自分や、自分に身近な人と重ね合わせて、考えるようになります。

第二に、子どもたちが、そのリアルな実感を出発点として、平和を尊重する意識を持つに至るプロセスが明確になったことです。

戦争や原爆は平和とは対極にある、真逆の存在ですので、それらをリアルに実感することは、これまでは当り前だと思っていた平和な日々が、実は全く当り前ではなく、先人の努力や、多数の犠牲の上にかち取られた、有難いものであると再認識することにつながります。それ故、平和は黙っていれば与えられるものではなく、能動的に守っていかなければならないという自覚を呼び起こします。

そして、その自覚は、平和に向けて自ら取り組むことへと発展していきます。

具体的には、あらゆる暴力は否定されるべきであり、仮に争いが生じても、話し合いで、平和的に解決しなければならないことが理解されます。それは、日常生活で自分にできる取組、すなわち、「人間関係を大切にする、ルールを守る、当り前のことを当たり前に行う」などの実践を伴うものとなります。

さらには、社会を担う一員として、戦争・被爆体験を語り継いでいく責任を認識したり、核兵器廃絶や世界の恒久平和に関心を持ち、声を上げることにつながっていきます。

第三に、修学旅行を実施している学校側のニーズが明らかになったことです。

さらに多彩な平和学習を展開するという観点からは、①本川（ほんかわ）・袋町（ふくろまち）小学校平和資料館、②ピースボランティアなどの専門ガイド、③追悼平和祈念館での平和集会の実施、④昼食場所としての新サッカースタジアム、⑤広島の子どもたちとの交流について、学校側の活用意向が高いことが分かりました。一方、⑥展示見学確保のための資料館の混雑緩和、⑦子どもたちの特性に応じた展示等の対応、⑧各学校での事前学習等に対する支援などを求める声もありました。

今回の調査を受けた対応としては、第一および第二の平和学習上の効果等について、現在修学旅行を行っている学校にフィードバックし、役立てていただくとともに、広く広島修学旅行が実施されている西日本以外の地域の学校に対しても、平和学習の必要性や広島修学旅行の重要性について認識を深めていただけるよう、丁寧に説明していきたいと考えています。このような活動を通じて、広島での平和学習のメソッド化を図ってまいります。

さらに、第三の学校側のニーズを踏まえて、広島として必要な支援措置を具体化していきたいと思います。

**※アンケート調査の資料は右の広島平和文化センターホームページでご覧になれます。**

### 《鈴木由美子（すずきゆみこ）広島大学副学長のコメント》

これまで多くの小中高等学校の皆さんが、広島を修学旅行先に選び、子供たちに平和学習を行ってこられました。今回のアンケート調査で、被爆地ヒロシマを実際に訪問し被爆の実相に触れることが、戦争や原爆をリアルに感じることにつながり、子供たちに平和意識を育てる上で優れて効果的であることがわかりました。時代や国を越えて平和な世界を構築することの大切さを伝え続けるために、広島への修学旅行が全国に広がっていくことを期待しています。

# 英国におけるヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展の開催

## ～世界遺産を有する歴史ある街と北アイルランド紛争の主な舞台となった街において～

広く被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国際世論を醸成するため、平成7年（1995年）から広島市と長崎市は共同で、海外「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を開催しています。

G7広島サミット開催直後の令和5年6月7日から9月10日まで英国のダラム市において、また、令和6年1月8日から2月28日まで同国のベルファスト市において、「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を開催しました。展示内容は、ともに、動員学徒として作業中に被爆し、犠牲となった中学生が被爆時身に着けていた腕章、中身が黒焦げになった弁当箱の複製、佐々木禎子さんの折り鶴など実物資料20点のほか、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネル30点などです。

オープニング前に展示を見学される
林 肇駐英国日本国大使夫妻（ダラム市）

まず、ダラム市での展示は、ダラム大学東洋博物館が会場となりました。開催期間中には、詩や折り鶴のワークショップを実施したほか、8月1日には広島市とダラム市をオンラインで結び、被爆体験証言者の河野キヨ美さんが、被爆体験証言を行いました。さらに、9月には、朗読ボランティアを現地に派遣し、原爆詩や体験記の朗読会を実施しました。

ダラム市のアンケートでは、「核兵器がもたらす惨状を思い起こさせる非常にタイムリーな展示会だ。」「人間が人間に対して行った非人道性の影響を目の当たりにし、非常に衝撃を受けた。」「核兵器を保有する、あるいは保有しようとしている国の指導者たちは皆、この展示会を訪れるべきだ。」などの感想が寄せられました。

また、ベルファスト市での展示は、リネンホールが会場となりました。開催期間中には、折り鶴や書道のワークショップを実施したほか、広島市とベルファスト市をオンラインで結んで被爆体験証言者の八幡照子さんによる被爆体験証言を2回実施しました。

その際、北アイルランド紛争の体験者の方も、「ヒロシマ・ナガサキの体験に触れることにより、改めて自分たちの街の歴史を思い起こし、平和や和解の尊さを再確認し、若い世代にも継承したい。」として、自身の体験を話されました。このように参加者は、悲惨な歴史は二度と繰り返してはならないとのメッセージを共有しました。

熱心に展示を見学する来場者（ダラム市）

（平和記念資料館　啓発課）

# 「大邱の日」・「ハノーバーの日」を開催しました

広島市は、海外の6つの都市と姉妹・友好都市提携を結び、交流を行っています。平成13年（2001年）に各都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を定め、毎年、この日の前後で市民参画型の交流イベントを開催して、都市間交流の一層の拡大と友好促進を図っています。

この度、5月に「大邱（テグ）の日」及び「ハノーバーの日」記念イベントを開催しました。

## 【大邱の日】

5月3日（金･祝）から5日（日）までの間、フラワーフェスティバル会場で開催しました。期間中は晴天に恵まれ、3日間合計で約4,000人が会場を訪れました。

3日の記念セレモニーでは、大邱の日実行委員会委員長と広島市長が挨拶するとともに、大邱広域市長から届いたメッセージを紹介しました。

その後のアトラクションでは、韓国伝統舞踊の「剣舞（コンム）」、「ポック舞」と伝統音楽の「サムルノリ」を披露しました。

また、3日間を通じて開設した「韓国・大邱マダン」では、韓服試着体験や韓国家庭料理販売を行い、家族連れや女性を中心に多くの来場者で賑（にぎ）わい、韓国の文化に触れることができました。

ステージで披露された韓国伝統舞踊

## 【ハノーバーの日】

5月12日（日）に、ひろしまゲートパークの大屋根ひろばで開催しました。

当日はあいにくの雨天でしたが、約180人が会場を訪れ、ソーセージやバウムクーヘン等の試食や、ハノーバー市と関係の深い上田宗箇流（うえだそうこ）のお茶席、ドイツ音楽コンサート等を楽しんでいました。なかでも、ヒロシマ・メッセンジャーによるハノーバー市の紹介コーナーは、ドイツ語講座やハノーバー市表敬訪問の様子を動画で紹介、ドイツのダンスの紹介等、盛りだくさんの内容で、来場者は興味深く見たり、聞いたりしていました。ドイツのお土産が当たるクイズでは、会場全体で盛り上がり、来場者からは「詳しくドイツ・ハノーバー市のことを知ることができた。」「ハノーバー市に行ってみたいと思った。」という声が寄せられました。雨天でも心が晴れやかになるイベントとなりました。

ヒロシマ・メッセンジャーによるドイツのダンスの紹介

（国際市民交流課）

# 「ひろしま留学生基金」にご協力を

本財団では、私費で広島に来ている外国人留学生の支援のため、皆様から寄せられる寄附金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、「ひろしま奨学金」を支給しています。しかし、昨今の金利低下等により、財源は大変厳しい状態となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

**基金へのご寄附に関するお問い合わせ**

（公財）広島平和文化センター　国際部 国際市民交流課
ひろしま奨学金担当
〒730-0811
広島市中区中島町1番5号
（広島国際会議場３階）
TEL（082）242－8879
URL：https://h-ircd.jp/scholarship.html

詳細はこちら
（国際市民交流課 HP）

**「ひろしま奨学金」とは**

広島市内の大学・大学院等に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和63年度（1988年度）より開始し、毎年30人の留学生に奨学金を支給しています。

～ウチも、ワシも～

# 広島市民じゃけえ！

―外国から来て広島市民になった人にお話を伺いました―

## フセイン・ザバッドさん（ドイツ／レバノン）

私は大学でプロダクトデザインを学ぶ学生です。父はシエラレオネ、母はコートジボワール出身、そして二人ともレバノンにルーツがあります。彼らはドイツで出会い、私が生まれました。私はドイツで育ちましたが、自分のアイデンティティを考えた時、どの国や文化にも属していないと感じます。そのことに、今でも悩み苦しむことはありますが、国境や国籍による区別は人が作ったものであって、自分は“地球の子”であるのだと考えています。

現在まで様々な文化に触れながら生きてきましたが、どんな状況にあっても私を支えてくれたのがイスラム教です。多くの困難を、「神が自分の傍にいてくれる。」と考えることで乗り越えてきました。私は、イスラム教は倫理的であり、筋が通っていると捉えています。

私は多くの場所を訪れ、その地域の文化に触れることが大好きです。他の宗教や考え方を知ることも好きで、決して否定はしません。他の考え方を否定する人たちを見ると悲しくなります。私がプロダクトデザインを学んでいるのは、創造することが好きなのはもちろん、グローバル化が進む世界で、様々な文化や国のデザイン要素を融合し、それぞれの美学や価値観を尊重したデザインを広めたいという思いがあるからです。

私はこれからも“地球の子”として、様々な問題と向き合い、自分に何ができるのかを考えて行動をしていきます。広島や長崎で起こった悲惨な歴史が、世界で繰り返される可能性が高まっている今、みなさんも現在地球上で起こっている紛争や虐殺に対して一緒に行動を起こしていってくださると嬉しいです！

※ これは短縮版です。全文はウェブ版機関紙でご覧になれます。

# 「広島市・安芸郡外国人相談窓口」をご利用ください

広島市と安芸郡4町（府中町、海田町、熊野町、坂町）に住む外国人市民のみなさんにご利用いただける相談窓口を開設しています。行政機関への各種届出や困りごとの相談に応じます。

また、相談員が、広島市へ引越してきた外国人市民のみなさんに対し、広島市での新しい生活に関する情報を提供します。

さらに、毎月第2金曜日の午後1時30分から午後4時まで、出入国在留管理局職員による相談（事前予約制）も行っています。

ぜひご利用ください。

**【連絡先】**

TEL（082）241－5010

E-mail：soudan@pcf.city.hiroshima.jp

**【場所】**

広島国際会議場３階　国際市民交流課内

**【時間】**

月曜日～金曜日の午前9時～午後4時

**【対応言語】**

スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、英語、フィリピノ語（フィリピノ語は金曜日と第1・第3水曜日のみ）

※その他の言語については、事前にご相談ください。

**【休室日】**

祝日、8月6日、12月29日～1月3日

詳細はこちら
（国際市民交流課 HP）